

セラーズ的概念主義の内実と根拠

東京大学 久保田智也

はじめに

セラーズによれば、私たちが何かを知覚することの内には、概念的思考の遂行が不可分な契機として組み込まれている。こうした主張のゆえにセラーズは、近年の概念主義論争、つまり知覚の内容はどれほど概念化されている（されうる）のか、知性に（どのように）依存するのかといった問題をめぐる議論状況において、「概念主義者」として引き合いに出されることがある（cf. McDowell 2009）。

しかしながら問題は、今なおセラーズ当人の「概念主義」的主張が明確に理解されているとは言い難いということである。セラーズ知覚論は他にも多くの興味深い論点を含んでおり、そちらに着目する先行研究は数多くある¹。しかしながら管見の限り、知覚経験に概念的思考が組み込まれているという論点について、セラーズの立場を全体として読み解いてみせる研究はない²。

実際のところ、さまざまな著作、論文、講義録における毛色の異なる説明が一つの整合的な理論を成しうるのかは差し当たり定かでない。なぜなら後述のように、セラーズの説明には一見して不整合な点や根拠がはっきりしない点があるからである。他方で、ある時期に立場を変更したという旨の発言もテキスト中には見つからない。こうした事情のゆえに、セラーズの「概念主義」には今日なお未解明なところがある。

この状況にあって本稿の目的は、知覚には概念的思考が組み込まれている（以下では、同じことを「知覚経験が概念的である」や「知覚において思考が生じる」などとも表現する）というセラーズの主張の内実と根拠を明らかにすることである。

第1節ではその内実を明確化するため、セラーズが与える二つの説明、すなわち複合直示句モデルによる説明と、不随意的信念形成による説明に着目する。これらの説明は一見して矛盾したものであるにもかかわらず、先行研究上はその点は等閑視されてきた。しかし、敢えて統一的な理解を試みるなら、セラーズの見解は次のようにまとめられる。知覚に概念的思考が組み込まれているとは、知覚のさいに命題的な信念が不随意的に形成されるということである。複合直示句を主語とする文の発話は、不随意的な信念形成があったことの指標となる。

第2節では、セラーズによる主張の根拠を再構成する。その根拠は、セラーズ哲学のいくつかの局面に見出すことができるが、本稿では、先行研究に

においてほとんど扱われてこなかった側面に着目する。具体的には、セラーズのカント解釈や「信頼可能性推論」(Brandom 1997)をめぐる議論をもとに、知覚に概念的思考が組み込まれているという主張の根拠が再構成される。

なお、本稿の主目的はセラーズの主張や論証の再構成にあり、それらの妥当性の検討にあるのではないということを注意しておく。

第1節 セラーズ的概念主義の内実

冒頭に掲げたセラーズの「概念主義」的主張は、彼のカント解釈のなかに出現する。例えば『科学と形而上学』では次のように述べている（なお、セラーズは同一の知覚経験をカント解釈の文脈では「直観 intuition」や「直観表象 intuitive representation」と呼び、それ以外の文脈では「として見る seeing as」、「知覚的受け取り perceptual taking」などと呼ぶ）。

彼 [カント] が「直観」として語っているものは、少なくともある文脈では、広義でありながら正当な意味において概念的であるとしても無理はない。[...]すると、直観は個体の概念的表象であるということになるだろう。(SM3 cf. KTE271ff.)

教科書的理解によるとカントは感性と悟性の二元論を採用し、感性は知覚(直観)の能力、悟性は概念を用いて思考する能力である(cf. A19/B33, A50/B74)。しかしセラーズはこの理解に反対し、カントにおいて対象を「直観する」ことは、すでにして概念的思考の遂行を伴うものであるとする。この見方はセラーズ自身の知覚論にも積極的に取り込まれてゆく。

予告の通り本節では、セラーズがカントから取り出したこの主張の内実を理解したい。すなわち、知覚に概念的思考が組み込まれているとはどのようなことか。この点についてセラーズは、SM等でのカント解釈から後年の知覚論に至るまで、一貫して「複合直示句モデル」(SRPC434)による説明を行っている。本節では、まずその説明を紹介した上で、もう一つの不随意的信念形成による説明との整合性を考慮に入れつつ、統一的な理解を目指す。

(a) 複合直示句モデルによる説明

複合直示句モデルによる説明の典型例は次の箇所に見られる。

知覚的受け取りは、通常、命題的形式を持つと考えられている。これは猫であると見なす。あのマットの上に猫がいて見なす。[しかし、]私の考えでは、受け取られているものは、例えば「このマットの上のこの猫」といった指示表現によって最もよく表現される。私たちは知覚的見なしを、すでに完全な命題的形式を持つものというよりも、命題的思考のための主語を用意するものと考えべきである。(KTI408, cf. KTE272; SM4-5; IKTE420)

この一節を以下のように敷衍することは自然に思われるかもしれない。第一に、知覚において生じる思考の内容は「この A は B である」のような命題によってではなく、むしろ「この A」のような複合直示句によって表現される。つまり、知覚に組み込まれている（つまり、対象を知覚するときいつでも一緒に生じる）思考というのは、「これは A である」のような信念や判断ではなく、対象を「この A」として考えるといった独特の種類のものである。

第二に、この思考の内容によって、その後生じる判断や信念の主語表現が確定する。例えば知覚のさいに対象を「この机」として考えたならば、その後形成される判断や信念の内容は、例えば「この机は頑丈だ」のような命題によって表現される。

(b) 誤読の批判

しかし、これは実際のところ誤解である。このような読解はセラーズの他の論述と折り合いがつかない。

まず、上の読解における第一の点について。セラーズは、厳密に言えば、知覚に際する概念的思考の内容が命題的に表現できないとは主張していない。思考の内容が「この A」をモデルとして理解されるべきであるということと、「これは A である」という文によって表現できるということは、実のところ両立可能である。

それ[この立方体という直観表象]は、「これは立方体である」という判断と同じ形式と内容を含んでいる。[...] /したがって、カントにとって

直観は、非明示的な文法的（またそれゆえカテゴリー的な）形式を持つ複合直示的な思考である。（IKTE408, cf. KTI408）

「直観」ないし「複合直示的な思考」の内容は、実のところ命題的な思考と「同じ結合と同じ内容」（SM5）を有している³。つまり、知覚において生じる思考は、「この A」という複合直示句によって「最もよく表現される」（KTI408）ものではあるが、内容上は「これは A である」という思考と変わりない。したがって、対象の知覚に組み込まれた思考とは、対象を「この A」として考えるといった、その内容を命題的には表現できないような独特のものではない。のちに見るように、セラーズが知覚に組み込まれた複合直示句をモデルとする思考とそれ以外の思考を区別するとき、その強調点はむしろ思考の内容が命題的に表現できるか否かとは異なる部分にある⁴。

次に、第二の点について。実際には、知覚における全ての思考の内容がいつでも後続する思考の主語に反映されるわけではない。というのも、セラーズは知覚における思考の具体例として「私たちは冷たい赤りんごを、こちらの面において赤いものとして、反対の面において赤いものとして、そして冷たく白いりんご果肉を蓄えるものとして見る」（IKTE422）や「私たちは砂糖の塊を白いものとして、また可溶的なものとして見る」（*ibid.*）といったものを挙げる。だが私たちが自らの信念を「この可溶的なものは…」や「このこちらの面において赤いものは…」という主語から語り始めることはほとんどないだろう。それゆえ、知覚に組み込まれた全ての思考がいつでも後続する思考の（表現の）主語を確定するとは言えない。知覚経験における概念的思考と、その他の思考を表現する文の主語表現との結びつきは、もっと緩やかなものとして受け取られるべきである。

（c）知覚における思考の不随意的形成

では、私たちは複合直示句モデルによる説明をどのように解するべきなのか。誤読を批判するなかで明らかになったのは、知覚に組み込まれた思考とそれ以外は、内容において区別されるわけではないということだ。ここでは、複合直示句モデルによる説明を正しく理解するために、二つの思考は実際にはいかなる点で区別されるのかを確認しよう。1975年の認識論・形而上学講義録（ME）における不随意的信念形成による説明を参照すれば、区別のポイントは思考の形成様式にあるとわかる。

その講義にセラーズは、他の場所でもそうしているように、知覚において生じる思考は「とても特別な種類の信念形成 believing」(ME28) であるということを強調する。ただしその特別さを、複合直示句と命題という対比とは異なる観点からも説明している。

私たちが知覚と呼ぶものの大部分は信念形成である。しかるに、[...] 信念形成には様々な種類がある。[...] 自分が通りを歩いているのを想像してほしい。[...] 通りを歩いている、向こうを見ると、[あなたは思う、] おお、スミスだ！ あなたは挨拶する。そして本当はロバートだったことに気づく。[...] これは一種の性急な信念形成である。[...] そこでは問うこと抜きで思考が働いている。「あれはスミスか？」という問いには考えも及ばない。[...] / この種の性急な信念形成は知覚に特徴的である。
(ibid.)

知覚における思考には二つの特徴がある。一方で、それは対象を知覚することで反射的に生じる。この点において、「これは云々か？」と疑問を抱き、対象を注意深く観察したり他人に尋ねたりすることの結果として生じる、自発的な信念形成から区別される。「知覚とは、受動的に信念を獲得するための習得された能力である」(ME98)。他方で、それは、推論を経て生じるものでもない。つまり、知覚において反射的に推論が生じ、その結果として信念が得られることもあるかもしれないが、知覚に組み込まれた思考はそのような仕方では生じないということだ (ibid.)。

結局のところ、知覚経験における思考は、反射的かつ非推論的に生じるという点でその他の思考から区別される。この固有性のゆえに、セラーズはその種の思考を「不随意的な信念」(ibid.) と呼ぶ。

ところで、知覚において思考が不随意的に生成するというこの主張は、先行研究においても時折言及されてきた (cf. McDowell 2009, 5; 三谷 2011, 49-51)。しかしながら、管見の限り、この論点と複合直示句モデルによる説明との連関に光が当てられることはなかった⁵。だからといってこの連関を論じる必要や意義がないわけではない。というのも両者は知覚経験に思考が組み込まれているという同一の事柄に対する説明であり、しかも、一方の説明によればその事実は命題的信念の不随意的な形成に存するとされ、他方に

よれば、形成されるのは命題的な信念ではないとされているように思われる（本節（b）で述べたようにこれは誤認であるのだが）。この状況にあって、二つの説明はそもそも整合的なのか、整合的であるとしたら総体としてどのような像を結ぶのかという問いに答えることが解釈上不可欠である。この要請に応えられていない限りで従来の研究は不十分なレベルに留まっている。以下では、二つの説明の統一的な理解を示そう。

(d) 複合直示句はいかなる意味で知覚における思考のモデルとなるのか

セラーズは知覚経験における思考のモデルとして、複合直示句「この A」を選出する。他方で、複合直示句がモデルとなるからといって、知覚における思考が複合直示句によってしか表現されない独特の内容を持つとか、その思考の内容がいつでも命題的信念の主語部分に反映されるとか、セラーズはそういったことを主張しているのではない。これらの事情は上述の通りである。

複合直示句モデルによる説明に対し、ここでは次のような解釈を提案したい。この説明においてセラーズは、複合直示句の使用が信念の非随意的形成の指標となると言っている。セラーズの書きぶりは些かミスリーディングだが、複合直示句モデルによる説明はそれ以上のことを意味しない。

その説明は次の二段階をなすものとして再構成できる。第一に、セラーズは主体が思考を言い表すときの文の主語表現に注目することを提案する。反射的に形成された信念の内容は、文の主語部分に反映されることが多い。

対象を何として見ているかは、主語名辞に詰め込まれている。それは問われているものではない——それはいわば、その後の問いに答えるための基礎である。（ME131, cf. 134）

とりわけ、対象を知覚してすぐさま「この本は…」や「スミスが…」と語り出すとき、主体が「これは本である」や「あれはスミスである」という不随意的信念を形成している見込みは高い。

第二に、とりわけ、複合直示句を主語とする文に着目することが推奨される。というのも、不随意的信念は、知覚において形成される。それゆえ、第一段階での指摘を踏まえるなら、不随意的信念形成の事例を見つけるには、

対象を知覚しているさいに主体が発話する文に着目すべきである。しかるに、固有名や確定記述句を主語とする文がそれらの指示対象を知覚していないときにも発話されるのに対し、「このしかじか」という複合記述句を主語とする文は、ほとんどの場合は指示対象を知覚しているときのみ発話される。したがって、不随意的信念が形成されたことの指標としての的確なのは、固有名や確定記述句などよりも、複合直示句を主語とする文の発話である。カント的直観のモデルとしては確定記述句よりも直示句の方が適しているというセラーズの指摘（cf. SM3, KTE272）の正しさはこの観点から認められる。

しかし、セラーズはいかなる動機のもとに不随意的信念形成の目印を提供したのか。それは、それが実際に生じている事例を読者が見つけやすくするためである。

というのは、不随意的信念形成の事例を見つけ出すには、反射的かつ推論的な信念形成や、自発的かつ非推論的な信念形成と見分けをつける必要がある。だが、その見極めが難しい。例えば誰かが、目の前にいる犬について「これは犬である」という信念を有しているとしよう。この信念は反射的かつ非推論的に形成されたのか、あるいは身体的特徴に基づく推論を反射的に行うことで形成されたのか、あるいはそれが犬であることを確かめようとする意図をもって対象を見て「うん、これは犬だ」と思うことで初めて形成された（それ以前に暗黙のうちに形成されていたということはない）のか。この判別を行うための観察可能な手がかりは何か。もし手がかりがなければ、不随意的信念形成の事例を見つけ出すことは難しい。それは、まさに不随意的に生じるという理由で、信念の主体本人にとってさえ、どのようなプロセスで生じたのか判別がつかないからである。しかし、具体例の発見が困難であると、不随意的な信念形成など本当にあるのだろうかという疑問が読者のなかで生じてしまうだろう。だからセラーズは、不随意的信念形成の事例を発見するための目印を与える必要があった。

さて、本節の考察を総括しよう。本節の主題は、セラーズ的概念主義の内実を明らかにすることであった。考察の成果として次の二点が明らかになった。知覚における概念的思考をその他の思考から区別する特徴は、それが不随意的に生成するという点にある。そして複合直示句が知覚における思考のモデルであるというのは、複合直示句の文の主語における使用が不随意的信念形成の指標になるということの意味する。

第2節 セラーズ的概念主義の根拠

前節の成果を前提として本節では、セラーズ的の概念主義的主張、すなわ

ち知覚において信念が不随意的に形成されるという主張がいかなる根拠をもつのかを明らかにする。

セラーズは、自らの概念主義的主張に対し大別して三つの根拠を提示している。そのうち二つは従来の研究においてしばしば論題とされてきたので、本節では残りの一つについて考察する。以下に見るように、その三つめの根拠に関してセラーズの論述には説明不足のきらいがある。本節ではその点を補うため、セラーズ哲学を資源として、彼が本来与えられたはずの論証を作り上げよう。

(a) 知覚の概念性に対する三つの根拠

第一の根拠は、言語や概念の習得に関わる。私たちは、言語や概念を習得するために、信頼可能な観察報告（つまり、その報告がなされたことが、報告者以外の人にとって報告内容を信じるための証拠となるような報告）を行えるようになる必要がある。そしてそれを行えるようになることは、一定の知覚に応じて一定の不随意的信念を形成するようになることでもある。したがって、言語を操り、ものを考えられる私たちは、概念的な知覚経験の主体でもある（cf. SK; ME97; KTE281-2）。

第二の根拠は、信念の知覚による検証に関わる。信念の正当化は推論によって行われる。しかるに、推論の前提に置かれるものは、命題でなければならない。したがって、知覚を通じて信念が正当化されうるためには、知覚に際して信念が形成されていなければならない（cf. EPM 13-25）。この主張はいわゆる「所与の神話」批判の一つの論点としてよく知られている（cf. deVries and Triplett 2000, XXX-XXXII）。

さて、本稿が着目する第三の根拠は、カントから引き出されている。

直観表象が、それに含まれる経験的概念の観点からして——子供の場合のように——どれほど内容の薄いものであったとしても、その表象は、私[直観表象の主体]を含むシステムのなかで他の対象と相互作用する、今その物理的対象という概念を胚として含んでいる（『純粋理性批判』の] A127-8 について熟考せよ）。(IKTE429, cf. 424; KTE277) ⁶

カントによれば、私たちは知覚において少なくとも、その対象が「今」とい

う時点、「そこ」という場所に存在し、私を含む他の諸物と相互作用する物体であるという信念を不随意的に獲得している。それゆえ、私たちの知覚経験は概念的である。また、前後の文章を考慮に入れるなら、セラーズはこのカント的見解に同意していると見なせる。

しかしながら、私たちが知覚に際して対象の位置や主体との相互作用に関する思考が働いているという主張は、何に基づいているのか。上述した二つの根拠づけの場合とは対照的に、ここでセラーズは断定的に主張を開陳しているにすぎない。

本節ではこの疑問に答えることで、第三の根拠を再構成する。結論を先取りすると、この主張はセラーズの知識に関する一般的前提から論証される。まずは、その一般的前提を確認しよう。

(b) 信頼性推論と標準的条件

セラーズは、知覚による知識を有するための要件を次のように述べる⁷。

[観察報告が] 知識の表現であるためには、報告は權威をもつだけではなく、その權威が当の報告者によってある意味で認識されていなければならない。[...] もし「これは緑である」という報告の權威が、そのような報告が生じたことから、知覚者に適切な形で関係している緑色をしたものの存在が推論される [つまり、報告が信頼可能である] という事実
に存するならば、この推論をなすことができる、したがって緑の概念だけでなく「これは緑である」と発話することの概念——まさに、知覚のためのある種の条件、すなわち正しく「標準的条件」と呼ばれるような条件の概念——をももっている人だけが「これは緑である」というトークンをその權威を認識しつつ生み出すことができる。(EPM73-5)

パラフレーズしよう。知覚によって対象を知るためには、自らの観察報告ないし不随意的信念の信頼可能性を自覚していなければならない。それはすなわち、自らの信念を特殊な推論で正当化できるということである（この要件は、知識の古典的定義「正当化された真なる信念」の「正当化された」のセラーズ内在主義的なヴァリエーションである）。その推論は「信頼可能性推論」(Brandom 1997) と呼ばれ、次のような形式を持つ：どんな主体、対象、環

境であれ、それらが条件 C を満たすならば、主体の信念 B は信頼可能である。(私、目の前の対象、目下の状況が条件 C を満たすならば、私の信念 B は信頼可能である。)私、目の前の対象、目下の状況は条件 C を満たす。したがって、私の信念 B は信頼可能である (cf. SK)。

主体がこの形式の推論を行うためには、その「しかじかの条件」、つまり、おおよその人間がおおよそ信頼可能な報告を与えることのできるのどのような状況かを知っていなければならない。この状況は「標準的条件」と呼ばれる。標準的条件にどのようなものが含まれるかは、セラーズ自身によって明確化されているわけではない(具体例はあげられるものの)しかし、実際のところ、その内容はあるモダリティの知覚が正常に遂行されるための条件であると言える。例えば、触覚において形成された信念「この服はガザガサしている」と視覚において形成された信念「この服は緑色である」とでは標準的条件が異なる。前者の標準的条件は正常な触覚が成立する条件(手が麻痺していない、など)から成り、後者は視覚のそれ(遮蔽物がない、など)から成る (cf. SK; EPM43-4)。このように言えるのは、対象を知覚していない、もしくは錯覚しているときに形成された不随意的信念は信頼可能ではなく、反対に、成熟した主体が対象を正常に知覚しながら信念を不随意的に獲得したならば、その信念は概して信頼可能だからである。

主体は、信念の標準的条件が一般にどのようなものかを知っているだけでなく、目下の状況でその条件が充足されていることをも知っている必要がある。それを知らなければ、推論において「私のしかじかの信念は、しかじかの条件下で形成された」という前提を用いることができないからである。

以上が、セラーズが知覚における知識の獲得のために課した要件(の一部)である。そして、セラーズ的概念主義の根拠を明らかにするという目的のために、以下の二つのことを確認しておこう。

第一に、標準的条件の充足を知ることは、知覚の対象がその時点でどこに存在するのかわかることを伴う。というのも上で見たように、知覚において形成される不随意的信念の標準的条件には、信念形成の時点で主体と対象が正常な知覚が可能であるような位置関係にあるという条件が含まれる。そしてこの条件の充足を知るためには、対象がその時点でどの位置にあるかわかるなければならない。つまり、「今、そこにしかじかのものがある」という形式の知識を持っていないなければならない。

第二に、信頼性可能性推論を行える主体は、信念が形成された場面で対象と主体と環境が一定の相互関係を取り結んでいると知っていなければならない。なぜなら、その推論によって信念の信頼可能性を示すためには、一般に

対象や環境と主体の信念の信頼可能性がどのように連関するかの知識が、目下の主体（自分自身）、対象、環境にも妥当することを前提する必要があるからである。「この服は緑である」という信念を例にとろう。これを信頼性推論によって正当化するためには、まず、「太陽光のもとで見られた物体の色についての報告は信頼できる」という一般的規則を知っている必要がある。そして、それだけでなく、この一般的規則が今の状況にも当てはまるということも知っていなければならない。それを知っていなければ（例えば、今回に限っては悪霊が私を欺いているかもしれないなどと疑う人は）、「私は太陽光のもとでその服を見た」ということに基づいて信念を正当化することはできない。

さて、これら二つの点から本節（a）で見たセラーズのカント的主張、つまり、私たちは知覚において対象の時空間上の位置や主体、環境などとの相互関係についての信念を不随意的に獲得するという主張を正当化することができる。それはすなわち、知覚に思考が組み込まれているという主張の正当化でもある。

（c）知覚に思考が組み込まれているということの論証

ある人がある対象を知覚する場面を考える。まず、その人が知覚を通じてその対象について何事かを知っていることは前提する（不随意的にか否かは問わない）。セラーズによると、『純粹理性批判』の認識論は、私たちが時空間的な対象について知識を持っているという仮定のもとに、その必要条件を分析するものである（cf. KTE282）。（a）で見たカント的主張の論証もやはり、主体が知覚の対象について知識をもっているという仮定のもとに組み立てられる。

知覚の対象についての知識を持っているならば、私たちはその知識を信頼可能性推論によって正当化できる。しかるに、その正当化を行える主体は、標準的条件の充足を確認できる。そして、これらのことから、主体は次の二つのことを知っていなければならないと言える。第一に、対象がいつどこに存在するのか。第二に、対象や環境が主体の信念の信頼可能性とどのように連関するのか。

では、これらについての信念はいかにして獲得されるのだろうか。それは、知覚において不随意的に、である。というのも一方で、知覚の対象が今そこにあるという信念は、もし形成されるならば、不随意的に形成される。実際のところ、この種の信念が何らかの熟慮や推論の末にようやく形成されるということは考えにくい。というのは、対象が自分の何センチ前方にあるかと

か、何月何日にあるのかといったことを知るためには、たしかに調査や推論が必要になることもあるだろうが、「今、そこにある」ということを信じるためにそうしたことが必要であるとは思われない。

他方で、目下の場面で主体、対象、環境がどのように相関するかについての信念も不随意的に獲得される。というのも、主体は、一般に主体、対象、環境の状態と、知覚において得られた信念の信頼可能性が取り結ぶ連関についての信念（しかじかの条件のもとでしかじかの信念は信頼可能である、という形式の）を持っている。それゆえ、目下の状況でそうした連関が成り立つということもまた、いかなる熟慮や推論もなしに、反射的に信じてしまう（錯視の驚きはこの信念が裏切られることに由来すると言える）。

以上から、私たちは、知覚の対象について知識を有しているならば、「対象は今ここにあり、目下の環境や私の信念の信頼可能性と一定の仕方で相関する」という形式の不随意的信念をも有している。それゆえもちろん、知覚経験は概念的である。

セラーズの「概念主義」的主張の第三の根拠づけは、彼の哲学を資源として上記のように再構成できる。もちろん、この論証の背後にあるセラーズの内在本義の問題点を無視するわけにはいかないが、さしあたりセラーズ解釈としての一定の成果は挙げられたとして本節の考察を終えよう。

おわりに

本稿の目的は、知覚経験には思考が組み込まれているというセラーズの「概念主義」的主張の内実と根拠を明らかにすることであった。その内実は、知覚において不随意的な信念形成が行われるということであった。その根拠は、知識の主体は信頼可能性推論を行うことができ、そのためには対象の位置や、対象、環境、主体の相互関係についての不随意的信念が知覚において生じていなければならないということであった。

ところでセラーズは、知覚における対象の現前様式が、知覚の主体が有する概念的思考によって変化するという現象学的考察を展開してもいる（cf. KTI, IKTE, SPRC）。したがって、知覚によって思考が引き起こされるといふ本稿で見たのとは反対に思考が知覚の在り方を規定するというのである。知覚と思考の関係をめぐるセラーズの思想を十全に理解したければこちらの論点を検討することも欠かせない⁸。これを今後の課題の一つとする。

注

- (1) 特にセラーズによるセンスデータの扱いについての研究は盛んであ

る。cf. Levine 2016; McDowell 2009, Ch. 2; O’Shea 2010; Redding 2012; Rosenberg 2007, Ch. 13; 過能 2019。

(2) 特に、後に見る複合直示句モデルによる説明を丹念に吟味するものは少ない。ただし例外として村井 2012 がある。

(3) セラーズはこの点に基づいて純粹悟性概念が感性的直観に対して妥当するというカントの主張を理解している。cf. KTE272.

(4) それゆえランドの見解に反してセラーズはカントを非命題的概念主義者として解釈してはいない。cf. Land 2015, 479-80n.

(5) この連関は ME において明瞭に説明されているが SM においてすでに仄めかされていた。cf. SM4.

(6) 複合直示句モデルによる説明が知覚における思考の内容に関わると誤解するなら、セラーズのこのような記述はほとんど理解不可能である。

(7) この点をめぐりセラーズは過度な内在主義者として批判されることがある。cf. Brandom 1997; 松本 2020.

(8) この点の先行研究には以下がある。cf. Natsoulas 2002, Sicha 2002, 村井 2012.

文献表

凡例

セラーズの著作は以下の略号で表記し、項数を付した。『経験論と心の哲学』からの引用は、浜野研三訳（2006、岩波書店）を参照した。また、カント『純粹理性批判』からの引用は、第一、二版をそれぞれ A、B とし、各版の項番号を記した。また、引用文中の括弧 [] 内は引用者による補いであるが、[...] は省略を意味する。

EPM Sellars, W., 1997, *Empiricism and the Philosophy of Mind, With an Introduction by Richard Rorty and a Study Guide by Robert Brandom*, Harvard University Press.

SM —, 1968, *Science and Metaphysics: Variations on Kantian Themes*, Routledge and Kegan Paul Ltd.

SK —, 1975, “The Structure of Knowledge”, in *Action, Knowledge, and Reality: Studies in Honor of Wilfrid Sellars*, H-N. Castañeda (ed.), Bobbs-Merrill, 295-347.

ME —, 1989, *The Metaphysics of Epistemology: Lectures by Wilfrid Sellars*, ed. by Amaral, Pedro V., Ridgeview Publishing Co.

KTE —, “Some Remarks on Kant’s Theory of Experience”, in Sicha

2002, 269-82.

KTI —, “Kant’s Transcendental Idealism”, in Sicha 2002, 403-19.

IKTE —, “The Role of Imagination in Kant’s Theory of Experience”, in Sicha 2002, 419-31.

SRPC —, “Some Reflections on Perceptual Consciousness”, in Sicha 2002, 431-43.

その他の文献

Brandom, Robert, 1997 “Study Guide”, in Sellars 1997[EPM].

deVries, William A. and Triplett, Timm, 2000, *Knowledge, Mind, and the Given: Reading Wilfrid Sellars’ “Empiricism and the Philosophy of Mind”, including the complete ext of Sellars’ essay*, Hackett Publishing Co. Inc.

Kant, Immanuel, 1998, *Kritik der reinen Vernunft*, Velix Meiner Verlag.

Land, Thomas, 2015, “No Other Use than in Judgment? Kant on Concepts and Sensible Synthesis”, in *Journal of the History of Philosophy*, vol. 53, Johns Hopkins University Press, 461-84.

Levine, Steven, 2016, “Sellars and Nonconceptual Content”, in *European Journal of Philosophy*, vol. 24, no.4, John Wiley and Sons Ltd., 855-878.

McDowell, John, 2009, *Having the World in View: Essays on Kant, Hegel, and Sellars*, Harvard University Press.

Natsoulas, Thomas, 2002, “The Experiential Presence of Objects to Perceptual Consciousness: Wilfrid Sellars, Sense Impressions, and Perceptual Takings”, in *The Journal of Mind and Behavior*, vol. 23, no. 3, Institute of Mind and Behavior, Inc., 293-316.

O’Shea, James R., 2010, “Having a Sensible World in View: McDowell and Sellars on Perceptual Experience”, in *Philosophical Books*, vol. 51, no. 2, Wiley, 63-82.

Redding, Paul, 2012, “Wilfrid Sellars’s Disambiguation of Kant’s “Intuition” and its Relevance for the Analysis of Perceptual Content”, in *Paradigmi*, vol. 30 no. 1, il Mulino, 127-140.

Rosenberg, Jay F., 2007, *Wilfrid Sellars: Fusing the Images*, Oxford University Press

Sicha, Jeffrey F. (ed.), 2002, *Kant’s Transcendental Metaphysics: Sellars’*

Cassirer Lectures Notes and Other Essays, Ridgeview Publishing Co.

Siegel, Susanna. 2021, "The Contents of Perception", in *Stanford Encyclopedia of Philosophy* (<https://plato.stanford.edu/entries/perception-contents/>)

過能洋平、2019、「W.セラーズにおける感覚印象概念の変化について」、千葉大学大学院人文公共学府プロジェクト報告書第342集『知覚・推論・発話をめぐるアスペクト形成』所収、5-15。

松本将平、2020、「知覚的知識に関するセラーズ的内在主義を擁護する」、『哲学の探求』第47号所収、221-40。

三谷尚澄、2011、「経験論の再生と二つの超越論哲学：セラーズとマクダウエルによるカント的直観の受容/変奏をめぐって」、『哲学論叢』第38号所収、45-60。

村井忠康、2012、「知覚と概念：セラーズ・マクダウエル・「描写」」、『科学哲学』第45号第2巻所収、99-114。